

京都スタジアム(仮称)は亀岡観光の新たな拠点となるか？ ～スタジアム建設と地域観光～

京都市観光経営学講座受講生 三野玄太

はじめに

京都府亀岡市に建設中で 2020 年春の開業を目指す京都スタジアム(仮称)(以下「京都スタジアム」)は府民にとって 25 年来の悲願のサッカー専用スタジアムである。しかし、度重なる候補地変更などスタジアムが辿った紆余曲折が府民の間に冷めた空気を漂わせていることも事実だ。また、府は亀岡市とともに国天然記念物アユモドキの保全対策に追われ、府民に対する情報の公開や十分な説明がなされてないとする向きも少なくなく、治水や交通などへの影響を懸念する周辺住民による反対運動も相次いだ。

暗雲立ち込めるスタジアム建設を巡る動きであるが、起工式を終え建設中の現在、考えるべきはスタジアムの有効活用ではなからうか。当初は府内の中心にあり、府域の均衡ある発展に資するとして亀岡市に建設が決定したわけであるが、施設概要や市の計画からうかがえるのはスタジアムと亀岡市に由来からある地域資源との連携による観光まちづくりである。亀岡市の観光の現状と課題を踏まえ、スタジアム活用による発展の可能性を探っていきたい。

第 1 章 京都スタジアム概要

京都スタジアムは JR 亀岡駅の北口の区画整理事業地に建設される。亀岡駅から京都駅までは約 20 分、嵯峨嵐山駅までは約 10 分の好立地で車窓からスタジアムが見える。スタンドには 21,610 人を収容でき、主にサッカーの京都サンガ、ラグビートップリーグ、大学ラグビー、アメリカンフットボールの試合が行われる。屋根には太陽光パネルを配置し、天然芝育成のため、太陽光を透す屋根材を採用する。最前席観客席からピッチまでは 7.5m で、一般席のほか、VIP 席や個室付きのビジネスシート、展望レストランに併設され飲食可能なスカイシートなどがある。

国際試合も開催できる京都スタジアムは最新設備を備え、観戦環境については日本屈指であるが、芝の養生のためスポーツ施設としての使用は年 60 日程度に限られる。試合日以外の 300 日の集客と運営が課題となる。球技専用スタジアムとしての役割だけでなく、普段使いできるスタジアムとして稼動する必要がある。スタジアムを核としたまちづくりを考える場合、施設が兼ね備える複合機能性に注目しなければならない。

その複合機能性は主に 3 つある。にぎわいを創出する商業ゾーン、日本初の屋内スポーツライミング(東京オリンピック競技)施設、そして防災備蓄倉庫としての機能だ。

商業ゾーンには観光客や地元住民を市場とする業種が出店(試合開催日を含む 365 日の営業)する。スポーツ系ではジム、ボディケア、スポーツクリニック、飲食物産系ではスポー

ツカフェ、ビアレストラン、京野菜・亀岡牛レストランが出店予定だ。また VR 体験や図書館等のサービスによりにぎわい創出に繋げていく。

スポーツライミングではオリンピック競技の 3 種目が室内で全て体験できる。西日本・近畿ブロック大会の開催地、日本代表の合宿地となるだけでなく、初心者・愛好者への教室の開催や会員の時間利用により競技人口の拡大を目指している。

また、スペースの利活用も最大限にできる。外部デッキはケータリングカーのグルメ市、フリーマーケット、ランニングコースとして、インナーコンコースでは京野菜直販所、地域特産品直売所、文化アートギャラリーとして活用できる。ビジネス利用として VIP ラウンジは宴会場(100 名)、研修室(150 名)に、スカイボックス(14 室)は貸宴会・貸会議室(最大 16 室:一室当たり 10 名)として利用できる。スカイレストラン(室内テーブル席:186 人 キッズスペース:50 人程度)は亀岡入込観光客・観光バスツアー等向けレストランとして営業する。

第 2 章 亀岡観光の現状

亀岡市は JR 嵯峨野線や京都縦貫自動車道で京都市内から短時間でアクセスでき、豊かな自然を中心とする観光資源が存在するにも関わらず、観光地として注目されることは少ない。その理由の一つには観光資源のネットワーク化の課題があり、結果として観光客の滞在時間が短く観光消費単価が小さくなっている。

亀岡観光には嵯峨嵐山駅と亀岡を結ぶ嵯峨野観光鉄道のトロッコ列車で京都から亀岡に入り、湯の花温泉で一泊し、亀岡から保津川船下りで嵐山まで戻るのがこの地でのゴールデンルートであるが、実際は日帰り観光客が多くを占める。亀岡三大観光の一つである保津川下りではここ数年アジアを中心とした訪日観光客も増えてきている。しかし、亀岡地域では大勢の観光客が入れる大型レストランがないため、観光客の多くは午前中に河下りをして、午後には嵐山・京都へ移動してしまう傾向にある。

亀岡の魅力は美しい自然に加え、京野菜や亀岡牛など食に関わるものである。「道の駅 ガレリア かめおか」併設の物産販売所、JA 京都による「たわわ朝霧」等で売り上げが好調で地元住民にとって今や必要不可欠な存在であるが、観光客には京野菜や亀岡牛に対する認知がなされていない。

ここで先ほど述べた京都スタジアムの複合機能性を振り返りたい。京野菜・亀岡牛レストランがスタジアムに存在することにより、観光客移動の問題や地元特産品の魅力発信に繋げることができる。京都スタジアムという一大集客スポットの誕生は観光客の滞在時間の延長や観光消費の拡大に繋げ、亀岡市の観光活性化の起爆剤として期待できる。亀岡に秘めたる可能性をアピールする最大のチャンスだといえる。

●亀岡を代表する3つの観光スポット 亀岡三大観光

・湯の花温泉

亀岡市中心部から西へ約7kmの静かな山あいにある温泉。戦国時代、武将たちが負傷を癒したと言われる古い温泉郷。亀岡駅から車で約15分。

・嵯峨野トロッコ列車

年間約123万人が乗車。嵯峨から嵐山を経て、亀岡に至る7.3kmを保津川沿いに走る観光列車。所要時間約25分。大人620円/片道。嵐山から亀岡まで約25分。

・保津川下り

年間約22万人が乗船。丹波亀岡から京都の名勝嵐山まで約16kmの溪流を約2時間で下るスリル満点の舟下り。大人4100円。亀岡駅から乗船場まで徒歩約10分。

●隠れた観光資源

・京都丹波/亀岡「夢コスモス園」

約4.6haの面積に20品種約800万本のコスモス、9月中は入園料半額 大人500円(平日)。亀岡駅から車で約15分。

・京馬車

馬車に乗って保津川下り乗船場まで行くことも可能。トロッコ亀岡駅まで約1分。

・丹波七福神めぐり

七福神を日本一早く廻れるというハイキングコース。全長約12kmの道のりで、スタンプラリーも楽しめる。

・ドゥムリン村

まるでイギリスが出現したかのようなプチ英国を楽しめる。亀岡駅から車で20分。

・ガレリアかめおか(道の駅)

亀岡牛や黒豆、丹波栗などの亀岡の名産品やここでしか食べられない特製亀岡牛コロッケも人気の物産市場。亀岡駅からバスで約10分。

・保津川ラフティング

亀岡を代表するアウトドアスポーツ。トロッコ亀岡駅から徒歩約5分。

・出雲大神宮

丹波亀山城下町

亀岡の発展の基礎は、織田信長の家臣だった明智光秀が築いた。光秀が城主であった丹波亀岡城跡が今も亀岡駅の目の前に残っている。

●周辺エリアでのイベント

亀岡光秀まつり(5月)

佐伯燈籠祭(8月)

保津川市民花火大会(亀岡平和祭)(8月)

亀岡祭(10月)

保津の火まつり(10月)

ガレリアかめおかでのイベント(不定期)

第3章 京都スタジアムを活用した旅の提案

ここまでは京都スタジアムの機能と亀岡観光の現状について述べてきた。従来からある資源と新しくできる資源とをどう繋いでいくか。人々に地域の魅力を発信するためにはユニークなアイデアが必要である。そこで、亀岡へ観光客を呼び込むためのプランを二つ提案したい。

一つ目は欧米から長期滞在の訪日観光客向けである。長期滞在での疲労を取り除くような旅である。心身ともにリフレッシュさせるスポーツや各種文化体験の場としてスタジアムを中心に考えていきたい。例えば城下町の街並みをサイクリングや芝生の上でのヨガ、スタジアムの落ち着いた空間で茶道や武道に取り組んでも良い。また小刀作りも人気である。アクティビティ後、自然を感じながら戦国武将が傷を癒した温泉の足湯で疲れを癒し、スタジアムのシャワールームで汗を流す。レストランで京野菜や亀岡牛を堪能。宿泊には近代的な大型のホテルではなく、古民家リノベーションで亀岡の街並みに溶け込むゲストハウスが良いだろう。嵐山までは保津川下りをし、次の京都市内観光に繋げていく。

二つ目は修学旅行生向けである。一般的に京都を訪れる修学旅行生は京都と奈良がセットの寺社仏閣を巡る旅をしている。寺社仏閣をスタンプラリーのように巡るのではなく多感な時期の生徒たちの心に残る体験が必要ではなかろうか。京野菜を収穫し、それをスタジアム周辺のスペースに持ち寄ってBBQができれば記憶に残る旅となる。アユモドキの生態を知る観光教育、森の京都について知れば京都の多様性を感じて故郷に帰るであろう。

おわりに

京都スタジアムは従来の競技施設のイメージから離れ、市民に開かれるとともに観光の拠点として新たな集いの場を目指すべきである。京都スタジアムはスポーツ庁のスタジアム・アリーナ改革推進事業と国の地域未来投資促進法による支援を受ける。スタジアムを核とした亀岡市の計画は地域未来投資促進法を活用したスタジアム計画支援の第一例目である。これらの支援の中で京都スタジアムは観光の拠点となるスタジアムを目指し、観光活性化の成功事例として新たな観光の在り方として国内外にアピールする必要がある。

また、スタジアムを亀岡観光の拠点とし、亀岡市が活性化することにより、京都市や京都府全域との連携が抱える問題の一つの観光地における混雑の負担を緩和することに繋がるのではなかろうか。今後は市民参加型プロジェクトとして第4次亀岡市総合計画～夢ビジョン～で京都スタジアム(仮称)と京都・亀岡保津川公園を活かしたまちづくりをテーマに産学官が一体となっていき動きもみられる。スタジアムの名称がどうなるのかも関心の的である。完成までまだ2年あると考えるか、もう2年しかないと考えるのか。京都スタジアムに過度な期待はしてはいけないのかもしれないが、街の変化を感じつつ未来の姿を想像していきたい。

参考文献

・ 亀岡市ホームページ

<https://www.city.kameoka.kyoto.jp/>

・ 京都府文化スポーツ部ホームページ

<https://www.city.kameoka.kyoto.jp/>

・ スタジアム・アリーナ改革ハンドブック

<http://www.meti.go.jp/press/2017/06/20170615003/20170615003.html>

・ 金森喜久男(著)スポーツ事業マネジメントの基礎知識 -日本サッカー界に起こったスタジアム革命 理想的な「劇場」はこうして生まれた- 東邦出版 2015年

・ 斉藤健仁(著)死ぬまでに行きたい 欧州サッカースタジアム巡礼 株式会社エクスマレッジ 2015年

・ 間野義之(著)奇跡の3年 2019・2020・2021 ゴールデン・スポーツイヤーズが地方を変える 徳間書店 2015年

・ 原田宗彦(著)スポーツ都市戦略 2020年後を見すえたまちづくり 学芸出版社 2016年